

黒滝正昭による『ドイツ・イデオロギー』 草稿のマルクス口述・エンゲルス筆記説批判 への反論

大村 泉

はじめに

本稿の筆者は、大村（2018b）において、『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエルバッハ」草稿がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したという仮説（以下、「大村仮説」、と略称）を提起した。これに対して黒滝（2020）は、この大村仮説を合理化する論拠は「ひとつも見出すことができなかった」（同、p.52）とし、さらに大村の結論は「荒唐無稽」（同、p.57）であって、ここでの文献考証の成果には「根本的疑問」（同、p.45）がある、と述べた。2019年秋には、橋本（2019）が、これとは真逆の全面的に大村仮説を肯定する見解を公表していた。当事者ならずとも両者に接した研究者には戸惑いあるいは驚きがあったのではあるまいか。

大村（2018b）を贈った黒滝の返礼は否定的であった。しかし否定の具体的な論拠が全く指摘されていなかったため、理由を聞かせて欲しいと依頼した。大村仮説の検討は、2019年8月23日に東北大学大学院情報科学研究科で開催されたオンライン版『ドイツ・イデオロギー』⁽¹⁾を紹介する国際会議⁽²⁾のメインテーマの1つであった。しかしこの席では、出席した黒滝からの発言はなかった。この席で黒滝の主論点を直接聞くことができれば本稿のような批判は必要ではなかった。しかし黒滝（2020）は既に一定の読者の手に渡っている。このことに鑑み本稿では黒滝の恣意的としか思えない立論の仕方や、黒滝が自分自身の引用文のキーワードを全く無視して大村仮説を批判している箇所⁽³⁾を指摘し、この批判を受け入れることができない理由を詳述する。

『ドイツ・イデオロギー』の草稿テキストには、同音異義語の取り違えという口述筆記以外には生まれないと思われる箇所が複数存在する。この事実をオンライン版『ドイツ・イデオロギー』の編集過程で発見したことが大村仮説の核心である⁽⁴⁾。大村（2018b）が取り上げたのは6箇所だが、黒滝（2020）は、4箇所について同音異義語の取り違えとみなしてはならないと批判している。批判がなぜ6箇所全てに渡らなかったのかは不明だが、反批判はこの4箇所に限定して行うことにしたい。黒滝の爾余の批判論点は大村の課題設定への誤解⁽⁵⁾が出发点にある。こうした批判への反論は注記するにとどめる。黒滝批判の核心部分に学術的信頼性が欠如していることが明らかになれば、それだけで本稿の課題は果たすことができるだろう。

1. 大村 (2018b) の概要

大村 (2018b) は、『ドイツ・イデオロギー』の第1章「フォイエルバッハ」の草稿のうち、MEGA² I/5の編集者がH^{5c}として一括した部分、すなわちマルクスが同草稿にあとから付記した通しページで40-72ページ部分（以下では、M40,42,43…と表記）の即時異文の特徴から、この部分はマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したと主張していた。即時異文とは、著者が手書きの草稿を執筆する際、「テキスト最下層の執筆で生まれた諸々の変更」(Grandjonc (1993), S.84)を指す。言葉を換えれば、著者が最初に正書法上整った文章（以下、基底稿と呼ぶ）を作成する途中で生まれた変更のことである。単純な書き損じや執筆途上で書き進めていたこととは別の考えを書きはじめたため生まれた異文（基底稿との間で違いがある最初に書いたテキスト）が該当する。これに対して、基底稿を仕上げたあと、その推敲途上で生まれる異文を後刻異文と呼ぶ。

H^{5c}の基底稿及び即時異文の筆跡は全文エンゲルスであって、マルクスの手になる部分は、決して多くない後刻異文と、ページ付けに限定される。著者不詳の草稿の執筆者同定では基底稿の筆跡がもっとも有力な典拠になる。この立場からすれば本草稿の著者はエンゲルスだが、この判断は失当である⁽⁶⁾。草稿には、次のマルクス口述・エンゲルス筆記の可能性を示唆する特徴が存在するからである。

- (1) 即時異文の出現頻度が異常に高い。通常のMEGAのフォーマット(横一段組み、41行/ページ)で、H^{5c}の即時異文の出現率は、平均17回/ページを超え、同時期のエンゲルスの単独稿の7倍弱、マルクスの単独稿に比しても2倍弱ある。
- (2) 即時異文の中には、同音異義語の書き間違いのように、口述筆記以外に原因を想定することが困難な事例がある。
- (3) マルクスの単独稿で即時異文の頻出回数がエンゲルスを超えて3倍強上回るのは、エンゲルスが文章を頭の中で反芻してテキストを練ってから執筆するのに対して、マルクスが、書きながら考え、書いては消し、消しては書くという癖があるからだ。このためマルクスの単独稿ではしばしば定冠詞や不定冠詞、また代名詞の性や格が急に変わったり⁽⁷⁾、いったん削除された単語が、すぐに修飾語等を伴って再現したりする場合⁽⁸⁾が多々ある。こうした事例をエンゲルスの単独稿に見出すのは容易ではない。こうした事例がH^{5c}ではマルクス草稿に劣らず頻出するのは、H^{5c}がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立した証左であろう。

大村 (2018b) は、H^{5c}の即時異文の特徴は、第1章「フォイエルバッハ」の草稿の前半、MEGA² I/5で言うH^{5a,5b}にも共通していることから、『ドイツ・イデオロギー』第1章「フォイエルバッハ」草稿全体に、ひいては『ドイツ・イデオロギー』草稿の全体にもマルクス口述・エンゲルス筆記の可能性があると主張し、上記(1)-(3)のなかでも(2)の同音異義語の混同を、草稿の口述筆記をうかがわせる直接的な証拠とみていた。大村 (2018b) で言及していたのは次の6例である。

- ① daβ ⇔ das (接続詞の冠詞あるいは関係代名詞への置換訂正及びその逆。3例)
- ② führ[te] ⇒ für (動詞と前置詞との混同。動詞の前置詞への置換訂正)
- ③ beiden ⇒ bei den (代名詞の前置詞 + 冠詞への置換訂正)

④ deß[halb] ⇒ des (副詞の冠詞への置換訂正)

黒滝の大村仮説批判の趣旨は、これらの混同を同音異義語の混同としてではなく、別の理由から生じた訂正とみなすところにある。ただし、この批判で③、④に言及することはない⁹⁾。

2. führ[te] ⇒ für に関する黒滝の批判

黒滝 (2020) は、上記①の 3 例を逐一取り上げ、大村 (2018b) を批判した後、②について次のように述べている。長文だが反批判に公正・正確を期すため全文を掲げよう。

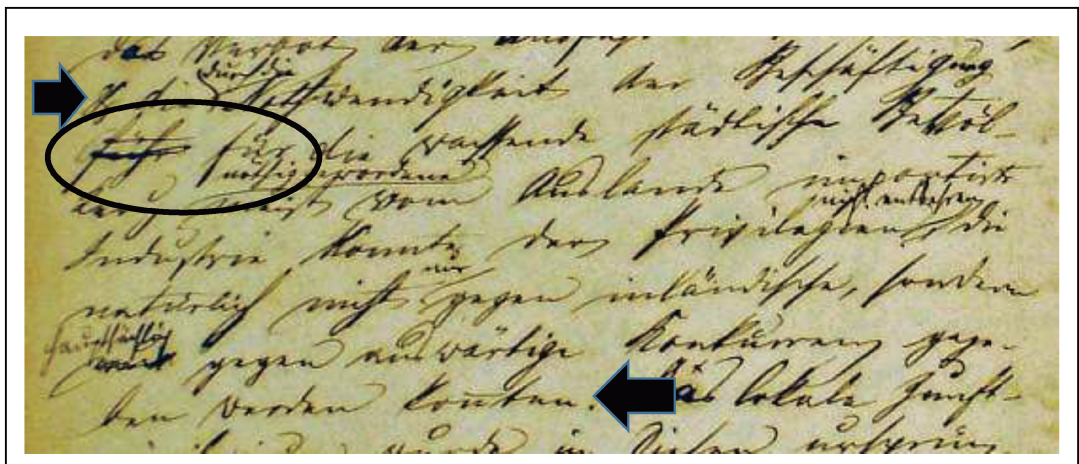
「それでは、「führ [te] (動詞) と für (前置詞) の混同→ドイツ人なら起こりえない混同」(レジメ p.4 : 編著 p.113.) と氏が強調する次の例はどうだろうか? M48 : Im Anfange bedingte die geringe cirkulirende Quantität des Goldes & Silbers die das Verbot der Ausfuhr dieser Metalle; & die |:durch die:| Nothwendigkeit der Beschäftigung führ für die wachsende städtische ~~Bet~~Bevölkerung |:nöthig gewordene:| meist vom Auslande importirte Industrie konnte der Privilegien |:nicht entbehren:|, die natürlich nicht |:nur:| gegen inländische, sondern ~~nur~~ hauptsächlich gegen auswärtige Konkurrenz gegeben werden konnten⁸⁾。上記下線部が「混同」とされるが、この点に関しては大村氏は、明快とは言い難い次のような説明を付け加えている。

『おそらくマルクスが、die Nothwendigkeit der Beschäftigung für と述べた際、やや間をおいたため、エンゲルスは die Nothwendigkeit der Beschäftigung führ[te] と書いたが、die wachsende städtische… Bevölkerung と続いたので führ を削除し für に置換したのでであろう』(編著 p.113. ここでの [] は大村氏)。これによると、マルクスが読み上げた際に für で切って間を置いたためエンゲルスは、マルクスが führteと言おうとして途中で切ったものと判断して führ まで書きかけたその時に、マルクスが für die… Bevölkerung と読み上げを再開したので、エンゲルスは自己判断の誤りを悟って慌てて führ を消し、für と書き直したということになるだろう。これは非常に不自然な想定であろう。マルクスがドイツ語の一つの単語の途中で読み上げを切ったなどと、どうしてエンゲルスは判断したのか? ドイツ語にもイントネーションというものがあるから、発音が同じであってもイントネーションで相手に違いが伝わるし、そもそもマルクスが読み上げていたのだとして、führ- で読み上げを切るなどということはありえないであろう。マルクスが読み上げたにしろエンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめ案は常に筆記より早く、数段先に進んでひとつの意味上の区切りまでは行くはずである (例えばこの場合、die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien まで行くなど)。訂正は、それを確認しつつ読み上げ・筆記している間にまた別の考えが生じて、議論が起り、合意に達して生まれるものでであろう。(黒滝 (2020)、p.47-48)

ここで黒滝は、大村 (2018b) のドイツ語の発声やイントネーションに関する「誤解」ないしは「無知」を一方向的に批判している。しかし、この箇所を何度繰り返し読んでみても、黒滝の批判が論拠としている具体的な事実を草稿に見出すことができなかった。

黒滝は、大村によると、「マルクスが読み上げた際に für で切って間をおいたため、エンゲルスはマルクスが führteと言おうとして途中で切ったものと判断して führ まで書きかけたその時に、

マルクスが für die …Bevölkerung と読み上げを再開したので、エンゲルスは自己判断の誤りを悟って慌てて führ を消し、für と書き直したということになるだろう。これは非常に不自然な想定であろう」、という。まず全く理解できないのは、大村のこの想定がなぜ「非常に不自然な想定」になるのかである。黒滝がこの批判の冒頭で引用した原文はエンゲルスの筆になるものであり、そこではエンゲルス自身が、「führ を消し、für と書き直し」ている。大村はこの事実を出発点にしている。しかし黒滝にはこの事実を事実として認めることが「不自然な想定」になる。黒滝は大きな勘違いを犯している。そこでこの反批判はエンゲルス自身が「führ を消し、für と書き直し」ている事実を草稿当該箇所¹⁰の精細画像によって再確認することからはじめる。



上は大村（2018b）に掲載した草稿当該箇所精細画像の再掲である。この再掲画像で、矢印に挟まれた箇所が問題になっている “&…konnten” の部分である。

最初の矢印真下が「führ を消し、für と書き直し」ている箇所（楕円で囲った部分）である。最初の führ の削除は二重の取り消し線で行われ、直後の文字は für である。大村の事実認識に誤りなどない。これは「不自然な想定」ではなく**確定している事実**である。大村（2018b）の画像で**黒滝も知っているはずの事実**であり、自ら訂正を引用までしているのである。**自家撞着した批判**というほかない。

大村（2018b）は、この画像と共に、MEGA² I/5 先行版及び MEGA² I/5 の学術附属資料部の記述をそのまま全文引用し、両者の読み方とその相違、問題の所在を詳論した。しかし黒滝の批判は、冒頭で原文を引用しているものの、こうした先行研究（＝草稿当該箇所の事実認識）を精査しここでの異文を含むテキストの成立解明に役立てようとする痕跡がない⁽¹⁰⁾。黒滝への反批判をより説得的なものとするため、この箇所がどのように読めるのかを次節で示す。この読み方は、MEGA² I/5 先行版及び MEGA² I/5 の異文解釈とその批判に基づく。詳細は大村（2018b）を参照されたい。以下はその結論である。

3. なぜエンゲルスは最初間違っ**て** für を führ と書いたのか

大村（2018b）は、この箇所は次のような順序を踏んで最終テキストが完成したと見ている。最後の第4番目のテキストは網掛けなどを除けばMEGA² I/5 テキスト部に収録されたテキストと同一である。改行箇所は草稿の精細画像に準拠している。abc[def]はabcの[def]への置換訂正、二重下線を付したghiはghiの挿入補完を意味する。1、2、3はその末尾で執筆中断があったことを示す。1、2は即時異文の置換訂正に伴う中断で、3は文章全体が正書法上未完と言う意味での中断を示す（動詞entbehrenほか欠落）。

1 & die Nothwendigkeit der Beschäftigung

führ für ⇒ führ[te] (動詞) の für (前置詞) への置換訂正

2 & die Nothwendigkeit der Beschäftigung

für die wachsende städtische Bet Bevöl-
kerung ⇒ Bet (書き損じ) の Bevölkerung への置換訂正

3 & die durch die Nothwendigkeit der Beschäftigung

für die wachsende städtische Bevöl-
kerung meist vom Auslande importirte
Industrie konnte der Privilegien, die ⇒
natürlich nicht gegen inländische, sondern
nur gegen auswärtige Konkurrenz gege-
ben werden konnten.

最初の die と Nothwendigkeit の
間に durch die を挿入、durch die
Nothwendigkeit…Bevölkerung
を Industrie の冠飾句にする。
前半の主語が Nothwendigkeit
から Industrie になる

4 & die durch die die Nothwendigkeit der Beschäftigung

für die wachsende städtische Bevöl-
kerung nöthig gewordene meist vom Auslande importirte
Industrie konnte der Privilegien nicht entbehren, die ⇒
natürlich nicht nur gegen inländische, sondern
nur hauptsächlich gegen auswärtige Konkurrenz gege-
ben werden konnten.

挿入順は確定できない。訂正
内容から、nur の hauptsächlich
への置換訂正と上の行への nur
の挿入は連続していたと見て
良いであろう。

参考訳：増大する都市人口のために仕事を与えるというやむを得ざる事情から必要となつて、大抵は外国から輸入された工業には、当然のことながら、国内的な競争に対するだけではなく、主要には海外との競争に対して向けることができた諸々の特権をなくすわけにはいかなかった。(なお、最終盤での nur の hauptsächlich への置換訂正とその上の行への nur の挿入によって、当該箇所は、「のではなく、専ら」が「だけではなく、主要には」に変更された。)

さて、führ (動詞 führen の語幹) と für (前置詞) の混同がここでなぜ生じたのか。耳から聞き、聞こえたように書くという口述筆記がそもそもの前提になる。しかしこの前提を置いて、なぜエンゲルスが混同したのか、その理由は問われる必要がある。既述のように、黒滝は、ここでの即

時異文 (= 修訂性) の検討を怠っていた。この検討を行うと、この設問に対する妥当な解が自然に浮かび上がる。

エンゲルスが *führ* (動詞) と記した箇所直前の *die Nothwendigkeit der Beschäftigung* (仕事を与えるというやむを得ざる事情) は、当初この文章の主語であった。*führ* は動詞 *führen* の語幹であり、文脈からすれば、ここに動詞の *führen* を書くなら、エンゲルスは *führ* ではなく、この動詞の三人称過去形である *führte* と書く必要があった。しかし彼は *führ* と書いてすぐ消し、*für* と記入した。これは、*für* に続く部分の内容 *die wachsende städtische Bevölkerung* (増大する都市人口) が、動詞 *führen* (を導く) の目的語にはならないと直感したからであろう。*Bevölkerung* は最初 *Bet* と書きはじめられ、すぐに消されているので、気づいたのは、この直前であろう。

まさに「エンゲルスは自己判断の誤りを悟って慌てて *führ* を消し、*für* と書き直した」のである。だから彼は、*führ* を *führte* と書く前に、すなわち動詞の語尾変化を記すよりも前に *führ* を削除して *für* (前置詞: ○○のために) に置換訂正したのである。もしマルクスが、*die Nothwendigkeit der Beschäftigung* を、この後で修正される *die durch die Nothwendigkeit der Beschäftigung*…と口述していた場合には、冠飾句に動詞が続くことなどあり得ないので、最初から *für* としていたであろう。

4. 研究史上類例がない黒滝のマルクス / エンゲルス共同執筆説

大村 (2018b) は、『ドイツ・イデオロギー』第 1 章「フォイエルバッハ」草稿は、マルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したと見ている。これに対して黒滝は、マルクス / エンゲルスの共同執筆説である。大村 (2018b) が批判した共同執筆説は、Mayer (1920) が先鞭を付け、MEGA¹、MEGA² 編集者が踏襲していると思われる理解で、①執筆に先立ちマルクス / エンゲルス双方の緊密な議論があったと想定し、②伝承されているテキストの筆跡を根拠に、二人の議論の成果を纏めたのがエンゲルスであったと言うものである。大村 (2018b) の口述筆記説は、①を前提に、②二人の議論を整理したのはマルクスであり、この整理をマルクスが口述、エンゲルスが筆記して草稿が成立したと考えていた。いずれも、結果的に生まれた草稿は、一個同一の MEGA² I/5 に収録された草稿である。黒滝は共同執筆説を採用している。しかしその内容は極めて独自のである。

既掲の引用文で、黒滝は「*führ*- [大村 (2018b) の推定では、*für*] で読み上げを切るなどということはあるまいだろう」と大村の推定を一蹴した後、次のように述べていた。「マルクスが読み上げたにしろ、エンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめの案は筆記より早く、数段先に進んでひとつの意味上の区切りまで行くはずである (例えばこの場合、*die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien* まで行くなど)。訂正はそれを確認しつつ読み上げ・筆記している間にまた別の考えが生じて、議論が起り、合意に達して生まれるものだろう」。

これは、上に詳しく述べた草稿異文の成立過程とは全く無縁の草稿成立過程のイメージである。そもそも、MEGA² I/5 に収録された草稿異文には、*die Nothwendigkeit der Beschäftigung führte meist vom Auslande importirte Industrie den Privilegien* という文章は存在しない。*führte* は *führ* と

書かれ、語尾変化 *te* が記される前に消されている。また、*Industrie* と *den Privilegien* の間には、*konnte* が初めから入っていて *Industrie konnte den Privilegien* となっている。黒滝は、「マルクスが読み上げたにしろ、エンゲルスが読み上げたにしろ、口頭で述べるまとめの案」が、MEGA² I/5 に収録された草稿からは独立に存在し、しかも「訂正はそれを確認しつつ読み上げ・筆記している間に」生じると想定する。黒滝の脳裏には、(マルクス/エンゲルスのいずれが出所か明確ではない)「口頭で述べるまとめの案」を成文化したテキストが別途存在することになる。研究史でこうした草稿の存在が報告されたことはない。黒滝のように MEGA² I/5 に収録された草稿とは別の、マルクス/エンゲルスいずれか出所不明の草稿が存在し、その草稿の改良バージョンが MEGA² I/5 に収録された草稿であるという主張を肯定する研究者はいない。黒滝の共同執筆説が極めて独自のだという所以である⁽¹¹⁾。黒滝の批判では、黒滝が「不自然」と思えば、エンゲルスによる同音異義語の訂正という事実そのものが雲散霧消するかのようによわれている。

黒滝 (2020) はその批判の結論部分で、大村の見地は、「エンゲルスは自主的でも自発的でもなく、自分の意志もなく、自分の頭を使うこともなく、受動的にマルクスの口述するところをただ筆記したことになる。…荒唐無稽な話」(p.57) だとしている。黒滝は大村 (2018b) がエンゲルスを *dictating mashine* (自動音声入力機) に貶める暴論であり承認することができないというのだろう⁽¹²⁾。

しかし上で見た、*führ* (動詞) と *für* (前置詞) の混同、こうした混同が生じた理由、そして *führ* を *führte* と正しく表記する前に削除し、*für* に置換するエンゲルスは、まさに、正確無比にマルクスの口述を再現する *dictating mashine* といえるのではないのか。& *die* 以下、*werden konnten*。までの1つのセンテンスを仕上げるのに、4度の執筆中断があった。*führ* を *für* に変更するとき生じた執筆中断や、*Bet* の *Bevölkerung* への置換訂正もエンゲルスの責任 (誤記入) だと思われるが、ほかはマルクスのものである。主語を含んでいた文節を、そっくり冠飾句に変更することなど、エンゲルスが発案する文章ではまず考えられない。エンゲルスは最初の文案をしっかりと考え抜いてから書くという書き癖がある。しかしマルクスの場合は、書きながら考え、書いては消し、消しては書くという書き癖がしっかり身についている。だからこのようなことも十分あり得る。

& *die* の直後に *durch die* の挿入を指示するとき、当然2人の間でやりとりがあったと見るのが常識的である。*durch die* の挿入によって、主語が *Nothwendigkeit* から *Industrie* に変わった。この主語に対応する動詞 *nicht entbehren* はあとの挿入である。*Privilegien* を規定する関係代名詞 *die* 以下末尾までの従属節をマルクスが口述したので急ぎエンゲルスが筆記したからであろう。あるいは、主語に対応する動詞が存在しない文章はそもそも存在しないから、マルクスは口述していたが、エンゲルスは聞き漏らし、あとから確認して補った可能性もある。可能性といえれば、MEGA² I/5 は、*nöthig gewordene* を後刻異文、すなわち、& *die* 以下、*werden konnten*。までの1つのセンテンスが、正書法上 (文法的に) 仕上がった文章になった後 (基底稿の完成後、基底稿の) 推敲段階で加わった異文と見ている。大村 (2018b) は、文字の筆勢から、この挿入は、*nicht entbehren* の挿入時点で加わった挿入で、挿入時期は基底稿完成以前と見ているが、MEGA² I/5 の推定が正しい可能性もある。またその場合には、マルクスではなく、エンゲルス自身の判断による

挿入と見ることも可能であろう。いずれにせよ、見事な連携がマルクス/エンゲルス双方の間にあった、と言うべきである。

5. **daß**⇔**das** に関する黒滝の私見批判

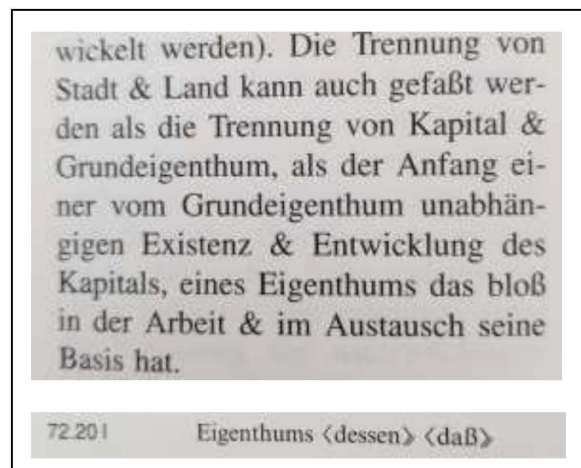
5-1 M42 の事例

「ドイツ語を母語とする著者が同音異義語を書き間違えることは稀だが、聞き間違えることはありうる、として、口述筆記が行われたことの傍証とする。具体例として **das** (冠詞、関係代名詞) と **daß** (接続詞) の混同が、草稿 H^{5c} に 3 例あるという。まず M42 (マルクスのページ付けで 42 ページ) にある文章: Die Trennung von Stadt & Land kann auch gefaßt werden als die Trennung von Kapital & Grundeigenthum, als der Anfang ~~de~~ einer vom Grundeigenthum unabhängigen Existenz & Entwicklung des Kapitals, ~~na~~ eines Eigenthums ~~dessen daß~~ **das** bloß in der Arbeit & im Austausch seine Basis hat⁵⁾。この下線を施した部分が、**daß** と **das** の混同とされる最初の例である。しかしこの場合は、元々 **dessen** に続く文章になっているので、指示代名詞 **dessen** によって代理される 2 格の補足語としての **daß** 節が、一定の区切りまで最初口頭で述べられたのであろう。それを記述途中で関係文に直した訳で、聞き間違えによる **das** との混同の例としては不適格と言わざるを得ない。」(黒滝 (2020)、p.47)

引用文で注意すべきは、黒滝が、ドイツ語原文からの引用文の削除箇所を、**dessen daß** とひとまとめに捉え、両者が纏めて削除されたと見ていることである。これには、黒滝の当該箇所の解釈が反映されている。実際、黒滝は原文の引用に続けて、「この場合は、元々 **dessen** に続く文章になっているので (何がどのように続くのか不明-引用者)、指示代名詞 **dessen** によって代理される 2 格の補足語としての **daß** 節が、一定の区切りまで述べられたのであろう。それを記述途中で関係文に直した…」と説明している。

この説明でまず疑問なのは、**dessen daß** といった言い方はめったに聞かない言い方で、マルクス/エンゲルスにはほかに用例があるのか。しかしこうした疑問は、黒滝の眼中にはない。

MEGA² I/5 はこの部分をどのように見ているのか。MEGA² I/5 には次の記述がある。この図で



上の画像は黒滝が引用したドイツ語テキスト、下は当該箇所の MEGA² I/5 学術附属資料部における異文表記である。後者は、MEGA² I/5 の本文 72 ページ左欄 20 行目 (左の上画像では、下から 3 行目) の **Eigenthums** 直後には即時異文があることを示す。MEGA² I/5 編集者は、黒滝のような削除理解をしていない。

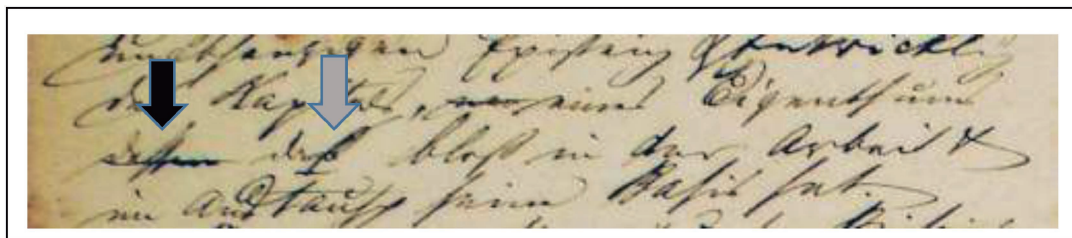
MEGA² I/5 では即時異文は異文の最後に下付きのスラッシュ「/」を付記して示す。この表記は、**dessen** 及び **daß** という

2つの即時異文が草稿では、Eigenthums という単語の直後に記されていることを示す。つまり、エンゲルスは、Eigenthums という単語を書いたあと、指示代名詞 dessen を書き、すぐ削除、さらに接続詞 daß を書きこれもすぐに削除した。daß を削除したあとどうしたのか。MEGA² I/5 は、Eigenthums の後に残っている関係代名詞 das を書き、この文章を hat. まで書き進めたと考えている。全体をつづめて言えば、dessen を書いたがすぐそれを消し、さらに daß を書いたが、それも消し、daß を das に置換訂正してこの文章を仕上げた。これが MEGA² I/5 の理解である。

daß を置換訂正した das が daß の同音異義語だというのは大村 (2018b) が指摘した。大村はこれを口述筆記説の証左の1つとしたが、MEGA² I/5 編集者は、同音異義語だという認識、この置換訂正がもつ『ドイツ・イデオロギー』成立史上の意義に触れることはない。これは MEGA² I/5 編集者が、口述筆記説の論証を草稿編集の課題の一部に設定していなからであろう。問題関心が欠落していると、同じ事実でも評価できないことは多々ある。

黒滝は、dessen daß のあともう少し先まで daß 節があったかのようにしている。しかしそれがどこまでなのか全く不明である。MEGA² I/5 の即時異文の表記では、文法的にそうした判断が可能のところまで、即時異文としての範囲を広げるのだが、ここは単発、あくまで dessen を書いてすぐ削除、daß を書いてすぐ das に置換訂正をしたと記している。なお、置換訂正かどうかは異文を本文テキストに組み入れて読んでみてはじめて判明する。

以下に、MEGA² I/5 の理解が草稿そのものの記述に照らして妥当であることを草稿の画像を掲げて示しておこう。



ここで注目すべきは、dessen (黒矢印) daß (灰色矢印) が一括して削除されず、独立に削除されていること (MEGA² I/5 の即時異文表記はこのことが念頭にあるからであろう)、daß の das への置換訂正は、ß (ドイツ文字のエスツェット) だけが小文字の s (旧字体) に書き換えられていることである。全文引用した黒滝の草稿理解がいかにか独りよがり、根拠が無いかが分かるだろう。

5-2 M64 の事例

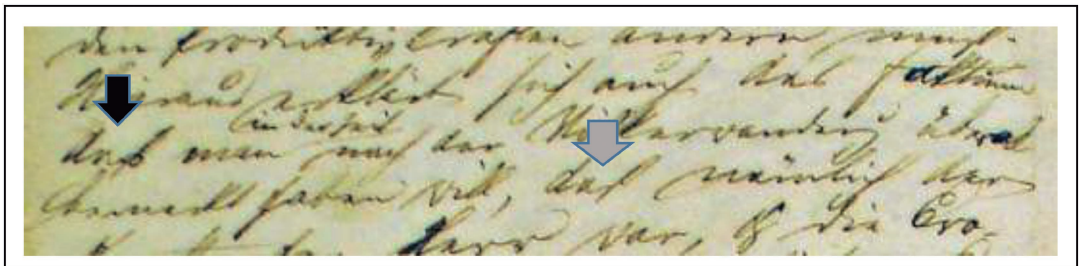
「次に M64 の例：Hieraus erklärt sich auch das Faktum daß das man |: in der Zeit:| nach der Völkerwanderung überall bemerkt haben will, daß nämlich der Knecht der Herr war, & die Eroberer von den romanisirten Eroberten Sprache, Bildung & Sitten sehr bald annahmen⁶⁾。下線部分が、daß と das の混同とされる。しかしそれは、das 以下の関係文が出来上がったことを前提にすればそうも言えるという結果論であって、当

初は直接、関係文なしに2行目の daß nämlich der Knecht der Herr war…に続く文章として読み上げて（マルクスが読み上げたとは限らない。エンゲルスが自分で二人の議論をまとめながら、読み上げつつ筆記し、それを聞きながらマルクスが再考して、さらに意見を述べたのかも知れない）、それを書いていた途中で、いや関係文をつけて説明を加えたほうが良いのではないか、と議論が出て、それが良さそうだと判断して書き換えたという可能性もある。」（黒滝（2020）、p.47）

この黒滝の批判では、「当初は直接」以下に続く次の推定に看過できない論理の飛躍がある。「関係文なしに2行目の daß nämlich der Knecht der Herr war…に続く文章として読み上げて…エンゲルスが自分で二人の意見をまとめながら、読み上げつつ筆記し、それを聞きながらマルクスが再考して、……それを書いていた途中で、いや関係文をつけて説明を加えたほうが良いのではないか、と議論が出て、それが良さそうだと判断して書き換えたという可能性もある」。

もし黒滝の主張どおりに執筆が進んでいたとすれば、das Faktum daß nämlich der Knecht der Herr war…と言う記述が「筆記」されたもの、紙面に記述されたテキストとして存在しないと筋が通らない。黒滝は、こうした一文をエンゲルスは、「読み上げつつ筆記し」と述べ、さらに続けて、「それを聞きながらマルクスが再考して、……それを書いていた途中で、いや関係文をつけて説明を加えたほうが良いのではないか」と述べたので最初の“daß”（接続詞）が“das”（関係代名詞）に変わったと推定しているからである。

しかし、草稿当該箇所は次のようになっている。



黒矢印を付した daß の das への置換訂正直後の文章は、nämlich der Knecht der Herr war…ではなく、黒滝の引用文にあるように、man nach der …である。daß nämlich der Knecht der Herr war…は灰色矢印以後である。この批判を合理化するには、黒滝は、ここでも既述の MEGA² I/5 に収録された草稿とは異なる草稿テキストの存在を実証する必要がある。

念のために附言すると、MEGA² I/5 のここでの異文表記は Faktum <daß> である（MEGA² I/5, S.935）。黒滝は、この MEGA² I/5 の記述を確認している。したがって、黒滝は、MEGA² I/5 編集者が、ここでは、エンゲルスが daß を書いてすぐ消し、das に置換して次に続けたと草稿を読んでいることを知っている。大村（2018b）はこのことを確認し、ここでは同音異義語の訂正がなされている、このような訂正はエンゲルスがマルクスの口述したテキストを筆記していると想定する以外、合理的な解釈はできないと判断した。この批判もまた黒滝の思弁にのみ存在する草稿テキストに基づく

批判でしかない。

5-3 M71 の事例

「最後に M71 の例：Das jus utendi et abutendi selbst spricht einerseits die Thatsache aus, das daß das Privateigenthum vom Gemeinwesen durchaus unabhängig geworden ist, & andererseits die Illusion, als ob das Privateigenthum selbst auf dem bloßen, unumkehr Privatwillen |: der willkürlichen Disposition über die Sache:| beruhe⁷⁾。この場合の das と daß は、口語体で daß を飛ばして das Privateigenthum…と書こうとして、思い直して daß に書き換えたような印象を受ける。」(黒滝 (2020)、p.47)

この黒滝の批判で念頭にある「思い直し」た人物、言葉を換えれば、ここでの主語は、エンゲルスである。spricht … die Thatsache aus, と書き、die Thatsache の前に einerseits とまで書いたのがドイツ人で、彼がこの文章の真の著者なら、すなわちこの文章は、口述筆記ではなく、著者でもあり筆者でもあるドイツ人のエンゲルスが書いているなら、コンマ (,) の直後に書くのは die Thatsache を説明する従属節の開始を告げる daß である。急に「口語体」を持ち出すのは、黒滝が大村 (2018b) を否定するためには何でもありの状況になっているからではあるまいか。ここでずっと論文調 (書き言葉) で書いてきて、ここで急に口語体 (話し言葉) に変わった、だから最初 das となった、というのは余りにも「不自然」というものだ。急に口語体になった事例を前後でほかにも数カ所挙証しないと、黒滝説には説得力はない。

黒滝はこの批判に注 7) を付けている。ここでは次のように述べられている。

[7) a.a.O., S.119, S.940, S.947. 抹消と挿入はエンゲルス。編著、レジメは同上。なおこの箇所については、渋谷① pp.174-176; 渋谷② p.171 参照。

渋谷氏は後に、これはエンゲルスによるマルクス口述の聞き誤りと考えるほか無いと判断し、その理由を以下のように詳論している：草稿の筆者のエンゲルスは、一旦“das”と書いた直後に、この“das”の末尾の“s”に“ß”を書き重ねて (即時異文) 定冠詞の“das”を接続詞の“daß”に変えたのである……。<書き重ね>によるこの変更の理由は、die Thatsache aus のあとに記されるべき単語は、ドイツ語の文法と文脈から見て、関係代名詞の“das”でも定冠詞の“das”でもありえず、“die Thatsache” (事実) という名詞の付加語を導く接続詞の“daß”でなければならないということにある。なぜならば、die Thatsache aus のあとの単語が関係代名詞であれば、先行詞となるべき die Thatsache が女性名詞であるのだから、関係代名詞は das ではなく die でなければならない、他方、定冠詞の das の場合には、定冠詞の“das”の直後に再び定冠詞の“das”が書かれることはありえないからである。/ ドイツ語の文章を自ら起草するドイツ人が、上述のように、最初に定冠詞の“das”だけを書いて、直ちにそれを同音異義語の“daß”に書き換えて、その前の名詞である“die Thatsache”の内容を説明する副文章を書き続けるなどというのは、およそ考えられないことである。この即時異文は、大村の言うように、「同一の著者、それもドイツ人である同一の著者に由来すると通常考えることができない即時異文」というほかなく、口述筆記によるエンゲルスの聞き誤りと考えるのが、もっとも自然なように思われる (編著 pp.161-162. / は段落改め。太字は原文)。

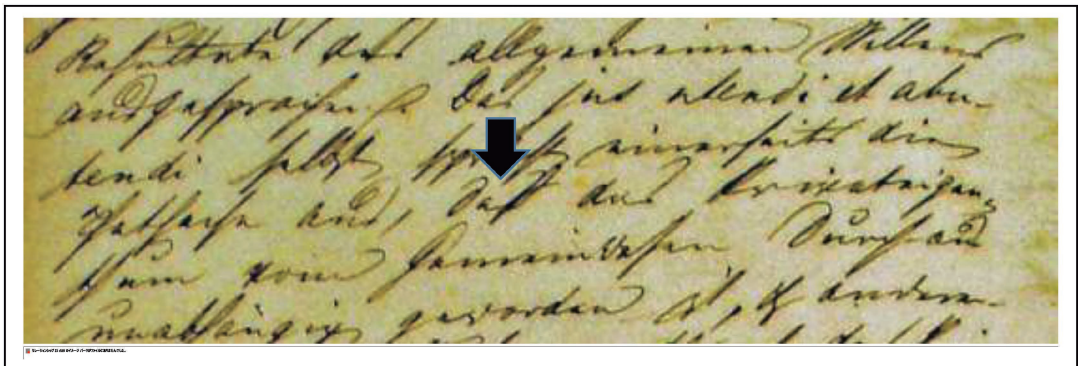
以上の渋谷説は、文法の説明それ自体は正しいが、問題は、ドイツ人であるエンゲルスが通常有り得

ないミス、聞き誤りならば簡単に犯してもそれは自然だという氏の判断にあらう。出来上がった文章を前提にして文法問題を論じるのではなく、そもそもそういう聞き誤りはありうるのか?と、疑問を持ってしかるべきではなからうか?」(黒滝 (2020)、p.58)

ここでは大村 (2018b) の立場を支持した渋谷に批判の矛先が向けられている。黒滝は、文法的な説明は、渋谷が無条件に「正しい」と断じる。しかし、「[エンゲルスに]そもそもそういう聞き誤りはありうるのか?」という疑問を持たないのは許せない、というのである。渋谷はここでマルクス口述・エンゲルス筆記説に立っているのだから、黒滝がわざわざここにこうした注記をするなら、エンゲルスは、マルクスの同音異義語の口述であっても、決して「聞き誤り」をしないことを本文で論証すべきであったらう。本文では口述筆記は全く横に置き、(主語のエンゲルスを明記せず)急に書き方が論文調から口語体(会話調)に変わったとって済ますのである。口述筆記の場合、同音異義語で「聞き誤り」があり得るのは洋の東西を問わない。これはもはや批判ではなく、ただの難癖であらう。

大村 (2018b) が想定しているマルクス口述・エンゲルス筆記の場合、書き写している間はエンゲルスの側に自由はない。spricht … die Thatsache aus, と書き、また die Thatsache という言葉の前に einerseits とまで書いているのだから、続く「ダス」という言葉は、daß であるのが普通だし、文法通りならこれ以外にない。しかし、小休止の号令があるまで口述筆記では前に書いたことを読み返す余裕はない。仕上がった文脈、文法的には daß であっても、「ダス」を das と聞き違い書き間違えることはあり得る。ドイツ人の使う「ダス」で一番多用されるのは冠詞の das である。ここではマルクスが「ダス、ダス」と続けたので、慌てて最初の das を daß に置換訂正した、というのがもっとも合理的な理解であらう。独裁者を英語では dictator と書くが、これが dictate (口述する) から派生した言葉であるのは容易に察しがつく。

念のためにここでも草稿の精細画像を再掲しておこう。



ここでは冠詞の das が接続詞の daß に置換訂正されている。MEGA² I/5 の異文表記は aus, <das> である (siehe, S.940)。この異文表記を本文のテキスト部分に組み入れると、aus, <das>, daß das Privateigentum と草稿では続いていること、つまり、aus, の後に das が書かれ、すぐ削除されて

代わりに daß が書かれ（置換訂正）、続けて das Privateigentum と書き続けていることが分かる。もちろん MEGA² I/5 にはこれが同音異義語の置換訂正だとは書かれていないし、口述筆記の可能性に言及されることはない。これを指摘したのは大村である。

むすび

2018 年秋に中国・武漢大学でマルクス生誕二百年を記念する国際学術研究集会⁽¹³⁾ があり、『ドイツ・イデオロギー』の最新の研究成果に関する Roundtable が開かれ大村は主報告者の一人になった。大村の正面には英国人の Terrell Carver が座った。彼は、『ドイツ・イデオロギー』第 1 章「フォイエールバッハ」の草稿準拠英語版（Carver, 2014）を出版し日本でも著名である。大村が『ドイツ・イデオロギー』のマルクス口述・エンゲルス筆記説を報告したあと、司会が Carver に質問した。少し間を置いて Carver はエンゲルスを dictating mashine（自動音声入力機）にするような大村説に与することはできない、と断言した。この議論は Roundtable の総括会議でも改めて話題になった。総括会議を主宰した Leonard Harris (Purdue University, USA) が決着を付けたいと言ったからである。この席で大村は発言を促され、本稿の最初に紹介した総計 6 件の同音異義語の混同を再度提示しこの混同を口述筆記以外の観点からどのように合理的な説明ができるか Carver に尋ねた。司会の Harris はこれに賛意を表した。Carver もまた、エンゲルスが dictating mashine であった可能性を認める発言をした。中国人研究者や大学院生が多数詰めかけていた立錐余地ない会場で一瞬のどよめきがあった。

このときの講演で用いたテキストのフルバージョンはその後武漢大学報に翻訳掲載され（大村、2019a）、この翻訳は日月を置かず、中国人民大学の『マルクス = レーニン主義研究』（2019 年第 5 号）にその全文が転載され（大村、2019b）、注目すべき社会科学系論文として紹介された。日本語版が出たのは 2017 年であった（大村、2017a）が、既に英語版（大村、2017b 及び 2018c）、韓国語版（大村、2018a）も出ている。英語版（大村、2018b）は掲載された雑誌そのものが最近論文集として書籍化され公表された（大村、2020）。この書籍版には MEGA² I/5 編集者自身がコメントを寄せてくれることを期待している。共同執筆説を擁護するのか、その場合の立脚点はどうか、甚だ興味深い。

注

- (1) 参照：<http://online-dif.com/index.html>
- (2) 『ドイツ・イデオロギー』と唯物史観—オンライン版公開国際シンポジウム—、2019 年 8 月 23、24 日、於東北大学情報科学研究科 2 階中会議室。
- (3) 本稿の筆者は黒滝の他の業績にこの種の問題を見出したことがない。またいわゆる「タラレバ」がこれほど用いられた黒滝論文もほかにはないように思う。誤解がないように附言する。
- (4) これを最初に詳述したのが大村（2017a）であった。この論文の骨子は 2017 年 9 月にリヨンで開催された国際会議で大村（2017b）として報告された。この報告原稿は翌年大村（2018a）として韓国で翻訳刊行された。大村（2017b）のフルテキストは大村（2018c）として英国の雑誌で公表された。

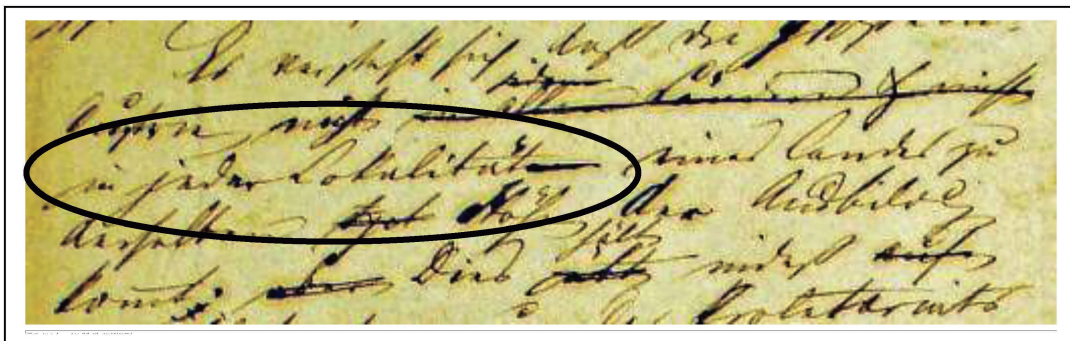
- (5) ここでいう爾余の論点とは、大村（2018b）が掲げた即時異文の諸類型への黒滝の批判である（本稿、注（7）、（8）、参照）。この即時異文の諸類型に関する議論は、即時異文の頻出度がマルクス/エンゲルスの単独稿に比べて多すぎるという議論の系論である。問題の性格から、こうした大村の主張へのもっとも有力かつ内在的な批判は、マルクス/エンゲルス双方の単独稿を探索し、大村の文献実証の結果を否定するマルクス/エンゲルスの単独稿を発掘することであろう。しかし黒滝はそうした探索を一切試みない。黒滝が固執するのは、異文の内容上の差異である。大村（2018b）の主題は、草稿のテキストがマルクスに由来するのがあるいはエンゲルスかを、内容の差異を捨象して、書誌上の事実関係に限定して探るところにある。大村が、即時異文の内容的差異を論じていないことを如何に問題にしても無い物ねだりの批判を超えない。この種の議論は、問題を拡散させるだけで最後は見解の相違で終わるのが関の山である。事實はひとつしかないのだから、解釈の相違に拡散しなくて済む研究の枠組みで、黒白決着を付けるようにすべきである。これが大村の問題提起の出発点である。黒滝の批判は、この肝腎な問題が理解できていないように思われる。
- (6) この筆跡から『ドイツ・イデオロギー』の第1章「フォイエルバッハ」の真の著者はマルクスではなくエンゲルスであり、唯物史観の第1発見者はエンゲルスだと主張したのが廣松（1966）、Bendien（2018）である。彼らに対する批判を内在的に行うには、テキストの筆跡とその内容の責任が異なる場合があること、すなわちマルクス口述・エンゲルス筆記を論証する必要がある。この批判が黒滝のように草稿の内容理解の相違としてなされても、その成果は部分的なもの、「確かにそこはマルクスかもしれない」といった議論に終始し、批判が全体に及ぶことはない。おそらく、分かったようで分からない共同執筆説が生まれるだけであろう。大村がマルクス/エンゲルスの書き癖に着眼したのは、従來說（エンゲルス主導説及び共同執筆説）のこうした隘路を突破しようと考えたからである。
- (7) 本文に記したように、即時異文の頻出回数を同時期の単独稿と比較するとマルクスはエンゲルスの3倍強に達する。マルクスの単独稿には執筆中に名詞が変わり対応する冠詞、代名詞の性や格が変更され、この結果生じた即時異文（削除された冠詞や代名詞）が多数存在する。これは書きながら考え書いては消し消しては書くマルクスに固有の書き癖がそもそもの出発点となっている。これらについて大村（2018b）は『経済学・哲学手稿』の草稿から実例をあげて説明した。『ドイツ・イデオロギー』草稿の筆跡は大半がエンゲルスだがこの種の即時異文はマルクスの単独稿に劣らず存在する。大村（2018b）はこの頻出の理由をマルクス口述・エンゲルス筆記に求めた。エンゲルスが2人の討議を取り纏めていた場合、この種の削除箇所を含む即時異文は少なくなって当然である。しかしマルクスの口述をエンゲルスが筆記した場合は、聞き違いなども加わり、マルクス自身が執筆する場合よりも増えるのが当然である。

大村（2018b）はこの典型例を一覧表記した。黒滝（2020）はこの一覧表記は「詰めが甘い」（p.49）と評する。「詰めが甘い」というのは、文脈からエンゲルスによって削除された冠詞の後に続く名詞は容易に想像がつくので、マルクスの口述はこの書かれなかった名詞以降まで続いていたと見るべきで、削除された冠詞でマルクスが口述を「止めた、という想定は、非常に不自然」（p.49）だからである。この黒滝の批評は、マルクスが冠詞だけ口述し、冠詞とセットになっている名詞を述べないのは通常あり得ないという前提がある。しかし『経済学・哲学手稿』には、本来なら書かれるべきはずの名詞が一切書かれないことなく、冠詞が削除訂正されている事例を容易に見出すことができる。マルクスの脳裏に、削除された冠詞とセットの名詞が浮かんだとしても、テキストにしない（口述しない）事例もあったというべきである。大村（2018b）が一覧表記した事例は、マルクスが冠詞を述べたところで続く名詞を口述するのではなく、直ちに冠詞の削除指示をした箇所であった可能性がある。

黒滝は繰り返し、マルクス/エンゲルスが書こうとしたものを探究し、訂正の意義を解明するのが必要だという。しかし学術研究では、書かれていない事実を事実として受け止め、その意義を探ることも必要であろう。黒滝は大村の問題関心は学術の王道から「脇道に逸れ」（黒滝（2020）、p.57）る議論であるかのように言うが、受け入れがたい暴言である。

- (8) 『経済学・哲学手稿』にはキーワードになる名詞が削除され少し進んだ箇所では形容詞などを付けて再現されている場合がある。エンゲルスの同時期の単独稿にはこうした事例は僅少である。大村（2018b）はこうした事例も、書きながら考え書いては消し消しては書くマルクスと、頭の中で文章を練り上げた上で書くというエンゲルスの書き癖の違いが出发点にあると考えた。『ドイツ・イデオロギー』の草稿でこの種の直ちに復活する即時異文の事例がマルクスの単独稿に劣らず頻出するのは、この草稿がマルクス口述・エンゲルス筆記によって成立したことを傍証していると言って良い。

こうした観点から、大村（2018b）は、この種の典型例を一覧表記したのだが、その際、『ドイツ・イデオロギー』草稿には、エンゲルスがマルクスの口述を「聞き漏らし、ないしは聞き違い」たので確認して訂正したものも含まれている可能性があるとして述べた。黒滝（2020）はこれを批判して、「だがしかしそういう場合が生じたら、筆記する前に直ちに聞き直すのが普通であろう。わざわざ不確かなことを筆記して、その上で訂正するというのは非常に不自然である」（p.50）、と原則的に否定する。大村（2018b）の一覧表を作成したとき、「聞き漏らし、ないしは聞き違い」の具体例として、次のような事例が念頭にあった。例えば、M52の in jeder Lokalitäten eines Landes ⇒ in jeder Lokalität eines Landes の変更、つまり複数形の Lokalitäten 末尾の en を削除して単数形 Lokalität に変更している事例などがそうである。下図、黒丸参照。



このM52の変更については、黒滝は、当該箇所の改稿が複雑なことを解明した渋谷（1998）を縷々紹介して、この改稿の複雑さから直ちに大村（2018b）の推定を否認している。

改稿の複雑さがなぜ大村推定の否定に繋がるのかは全く理解できない。しかしその前に、そもそもドイツ語では in jeder Lokalitäten とは絶対に書かない。Lokalität の複数形である Lokalitäten を使うなら in jeden Lokalitäten である。口述の「聞き漏らし、ないしは聞き違い」以外にこうした誤りは生じようがない。黒滝の理解とは逆に、ここではマルクスが複雑な改稿を指示したので、ドイツ人には本来あり得ない「聞き漏らし、ないしは聞き違い」が生じたと見るべきであろう。

最後に、黒滝のように最初からこうした事例が生じることを原則的に否定する立場に立つと、大村（2018b）が投じた最初の問題、すなわち、『ドイツ・イデオロギー』草稿における即時異文の数の多さを合理的に説明するにはどうすれば良いかに確たる回答を与えることはできない。

- (9) ③、④を黒滝が無視したのは、黒滝が両者を単純な筆記ミスの訂正と考えていて、これを理由にすると、独自の・積極的な訂正理由を思いつかないからであろうか。
- (10) ちなみに、内外の研究史上でここでの *führ* の *für* への訂正置換を報告したのは渋谷 (1998) を嚆矢とする。2004年に刊行された MEGA² I/5 先行版では *führ* の *für* への訂正置換は報告されていない。先行版のこの箇所の異文表記は 1972年に刊行された MEGA² 試作版を踏襲している。渋谷に次いで *führ* の *für* への訂正置換を報告したのは 2017年に刊行された MEGA² I/5 であった。
- 渋谷 (1998) の別冊『注記・解題』の 124 ページ、注 26 が詳しくここでの改稿に触れている。渋谷の改稿理解は、*führ* の *für* への置換訂正に関する部分を除くと、MEGA² 試作版の理解を踏襲している。なお、渋谷 (1998) にも MEGA² I/5 にも *führ* と *für* とが同音異義語だということ、この混同が口述筆記によるものだという記述はない。
- (11) 黒滝 (2020) は、黒滝独自の共同執筆説を、「マルクスとエンゲルスが同じ時間・同じ場において議論を続けながら共同で文章を創っていく草稿共同作成過程」(p.57) とイメージしている。明瞭な定式化は存在しないが、黒滝自身は、マルクス/エンゲルスがワンセンテンスずつ述べあって MEGA² I/5 に収録された草稿の草案を書き、それをさらに修訂して MEGA² I/5 の収録草稿に仕上げたと見ているのであろうか。『ドイツ・イデオロギー』草稿の膨大な分量と、その作成時間の短さ、またマルクス/エンゲルスの当時の多忙を考慮すると、黒滝のこうした想定は、甚だリアルさを欠く。
- (12) 黒滝の場合、エンゲルスの「誇り高い性格」への強い思い入れがあり、単なる口述筆記の筆記者の役回りを引き受けるはずがない、と考えるのであろうか。黒滝のこうした考えを徹底すれば、廣松 (1964)、Bendien (2018) と同じエンゲルス主導説になるはずだが、共同執筆だということ。
- (13) 武漢大学/ローザ・ルクセンブルク基金協会共催マルクス生誕 200 年国際学術会議 (<http://philosophy.whu.edu.cn/info/1037/7793.htm>)

文献一覧 (本文及び注記では、以下の見出しのみを掲げている)

『ドイツ・イデオロギー』原典 (刊行順)

- (1) Rjazanov (1926): Rjazanov, David 1926: „*Marx und Engels über Feuerbach. Der erste Teil der „Deutschen Ideologie“.* Einführung des Herausgebers.“ Marx-Engels-Archiv, Bd.1. Frankfurt am Main-West: Marx-Engels-Archiv-Verlags G.M.B.H.
- (2) MEGA¹ I/5 : Karl Marx, Friedrich Engels 1932: *Die Deutsche Ideologie. Kritik der neuesten deutschen Philosophie in ihren Repräsentanten, Feuerbach, B. Bauer und Stirner, und des deutschen Sozialismus in seinen verschiedenen Propheten. 1845-1846.* Marx-Engels-Gesamtausgabe, I. Abteilung, Band 5. Berlin: Marx-Engels-Verlag G.M.B.H.
- (3) MEGA² 試作版 : Karl Marx, Friedrich Engels 1972: *Karl Marx, Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA) Proband.* Berlin:Dietz Verlag.
- (4) 渋谷 (1998) : 渋谷正編・訳 カール・マルクス、フリードリヒ・エンゲルス著 1998 : ドイツ・イデオロギー : 序文・第 1 巻第 1 章 (草稿完全復元版) : 新日本出版社。
- (5) MEGA² I/5 先行版 : Karl Marx, Friedrich Engels und Joseph Weydemeyer 2004: *Die Deutsche Ideologie: Artikel, Druckvorlagen, Entwürfe, Reinschriften, Fragmente und Notizen zu I. Feuerbach und II. Sankt Bruno.* *Marx-Engels-Jahrbuch 2003.* Berlin: Akademie Verlag

- (6) MEGA² I/5 : Karl Marx, Friedrich Engels 2017: *Deutsche Ideologie. Manuskripte und Drucke. Marx-Engels-Gesamtausgabe*, I. Abteilung, Band 5. Berlin: De Gruyter Akademie Forschung.

引用、参考文献 (刊行順)

- (1) Mayer (1920) : Mayer, Gustav 1920: *Friedrich Engels. Eine Biographie* Bd. 1: *Friedrich Engels in seiner Frühzeit*, Berlin, Verlag von Julius Springer, 1920; Zweite Auflage, 1932.
- (2) 廣松渉 (1966) : 廣松渉、初期マルクスの思想形成、『思想』第 507 号、1966 年 9 月、岩波書店、pp.1-16.
- (3) Grandjonc (1993) : Grandjonc, Jacques (Redaktionskommission der IMES) 1993. *Editionsrichtlinien der Marx-Engels-Gesamtausgabe (MEGA)*, Dietz Verlag Berlin, 1993, S.84.f. 本書の全文訳は『マルクス / エンゲルス・マルクス主義研究』第 32 号、1998 年、86-93 ページ、参照。
- (4) Carver (2014) : Carver, Terrell, and Daniel Blank 2014: *Marx and Engels's "German Ideology" Manuscripts Presentation and Analysis of the "Feuerbach chapter."* New York: Palgrave Macmillan.
- (5) 大村 (2017a) : 大村泉 : 口述筆記説に基づく『ドイツ・イデオロギー』I. Feuerbach のオーサーシップ再考、『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 59 号、2017 年 7 月、pp.17-50. 八朔社。
- (6) 大村 (2017b) : Omura, Izumi: Re-examining the authorship of the "Feuerbach" chapter in *The German Ideology* on the basis of a hypothesis of dictation. *Marx 1818 / 2018. New developments on Karl Marx's thought and writings*, Lyon (France), 27-29 September 2017 (国際会議報告)。
- (7) 大村 (2018a) : Omura, Izumi 2018: Re-examining the Authorship of the "Feuerbach" Chapter in *The German Ideology* on the Basis of a Hypothesis of Dictation, in: *Marxism 21*, Vol.15 (1), pp.101-135, 2018 年 (※韓国語、翻訳底本は大村 (2017b))
- (8) Bendien (2018) : Bendien, Jurriaan 2018: https://marxandphilosophy.org.uk/reviews/15919_a-world-to-win-the-life-and-thought-of-karl-marx-by-sven-eric-liedman-reviewed-by-david-mclellan/ (comment on the 27th June 2018 at 6:30 pm)
- (9) 大村 (2018b) : 大村泉編著『唯物史観と新 MEGA 版「ドイツ・イデオロギー」』(社会評論社、2018 年 10 月) 第 5 章「唯物史観の第 1 発見者」
- (10) 大村 (2018c) : Omura, Izumi 2018: Re-examining the Authorship of the Feuerbach Chapter in *The German Ideology* on the basis of a Hypothesis of Dictation. in: *The European Journal of the History of Economic Thoughts*, Marx special issue, Vol.25 (5), October 2018 London and New York: Routledge.
- (11) 大村 (2019a) : 大村泉、盛福剛及び陳浩訳、Re-examining on the Authorship of the Feuerbach Chapter in *The German Ideology* (中国語)、武漢大学学报第 72 卷第 2 号 54-84 ページ、2019 年 (<http://www.wslid.cbpt.cnki.net/WKD/WebPublication/paperDigest.aspx?paperID=dff034b4-c131-438d-851d-2710cd62a2e8>)
- (12) 大村 (2019b) : 大村泉、盛福剛及び陳浩訳、Re-examining on the Authorship of the Feuerbach Chapter in *The German Ideology* (中国語)、中国人民大学『マルクス = レーニン主義研究』、2019 年第 5 号、28-47 ページ。
- (13) 橋本 (2019) : 大村 (2018b) 書評、経済理論学会編『季刊経済理論』第 56 卷第 3 号、2019 年 10 月、79-82 ページ
- (14) 黒滝 (2020) : 黒滝正昭、『ドイツ・イデオロギー』は「マルクス口述・エンゲルス筆記」の産物か?—大村泉説の吟味—、『宮城学院女子大学人文社会科学論叢』第 29 号 (2020 年 3 月)、45-60 ページ。
- (15) 大村 (2020) : *Marx at 200: New Developments on Karl Marx's Thought and Writings*, By Gilbert Faccarello & Heinz

謝辞

本稿の作成では、窪俊一、渡辺憲正、橋本直樹、盛福剛、玉岡敦各氏らから有益な助言を得た。とくに窪氏には、専門のドイツ語学の観点からドイツ語の口述筆記の特質について貴重な指摘を頂いた。記して感謝したい。

「はじめに」に記した通り、大村（2018b）を献本したとき黒滝正昭氏の返礼では私見を具体的な根拠をあげずに否定されていた。このため、理由を明らかにして欲しい、と返礼に返信した。黒滝氏の私見批判はこの返信への回答であったのかもしれない。私見は最初、古くは廣松（1966）－その先鞭を付けたのは Rjazanov（1926）だが－、最近では Bendien（2018）の『ドイツ・イデオロギー』草稿＝エンゲルス主導説を批判することが念頭にあった。この研究を徹底すればするほど、Mayer（1920）に始まり MEGA¹²の編集者に継承された共同執筆説批判にも行き着いた。今回、頂戴した黒滝氏のそれは氏独自の共同執筆説からの私見批判であったが、同音異義語の書き間違い部分を逐一再検討してみて、改めて『ドイツ・イデオロギー』草稿のマルクス口述・エンゲルス筆記説に確信を持つことができた。こうした再検討の契機を与えられた黒滝氏に感謝の意を表す。

2020年5月に本稿のドラフトを本誌編集委員会に送付し、学術誌上の反論権を認め、掲載を願い出たところ、本誌編集委員会は臨時の編集会議を開催し、この掲載を諒とされた。記して本誌編集委員会に感謝の意を表す。

*本稿は科研費B（課題番号：18H00834）の研究成果の一部である

Gegenkritik zu Masaki Kurotakis Kritik an meiner Hypothese, dass das Manuskript der *Deutschen Ideologie* ein Produkt von “Marx diktierte und Engels schrieb” ist

Izumi OMURA

Dieses Papier ist eine Gegenkritik zu Masaki Kurotakis Kritik an meiner Hypothese, dass das Manuskript der *Deutschen Ideologie* ein Produkt von “Marx diktierte und Engels schrieb” ist. Kurotaki sagt, er habe meine Hypothese sorgfältig geprüft und sei zum Schluss gekommen, dass es mir nicht gelungen sei, meine eigene Hypothese aufzustellen. Aber er kritisiert die beiden meiner Hypothese zugrundeliegenden Argumente nicht überzeugend. Das erste davon ist, dass es in diesem Manuskript eine Vielzahl von sofortigen Varianten gibt, die Engels nie gemacht hat, die aber Marx immer gemacht hat. Genau genommen ist die Anzahl der sofortigen Varianten in diesem Manuskript doppelt so hoch wie in Marx’ *Ökonomisch-Philosophische Manuskripte*. Warum ist das passiert? Kurotaki hat das überhaupt nicht berücksichtigt. Als zweites Argument habe ich darauf hingewiesen, dass die Homonyme in diesem Manuskript typografische Fehler enthalten. Ich gab 6 Fälle. Kurotaki kritisiert, dass vier Fälle davon nicht als die Verwechslung der Homonyme betrachtet werden sollten. In dieser Kritik argumentiert er für ein anderes Manuskript, dessen Existenz nicht bestätigt wurde, oder er argumentiert, als ob die Tatsache, dass Engels die Homonyme korrigierte, nicht existierte. Seine Kritik kann nicht als ein Ergebnis der akademisch sorgfältigen Prüfung angesehen werden.